

『備えてまっか〜！まさかの時の食—IV』



1. 講演

「メディアから見た防災現場のルポや新しい食」

読売テレビ報道局解説委員 高岡達之氏

災害はいつ起こってもおかしくない。災害が起きれば災害から完璧に身を守ることは難しい。

一番大事な視点は、どうやって生き残るかということである。

阪神淡路大震災の経験をうけ、行政も災害に備えたそれなりの備蓄があり、内容もよくなった。ところが東日本大震災では、配られたおにぎりに対し「こんな冷たいものを」といった苦情が出た。避難場所では、冷たいもの、好みに合わないものを食べざるを得ないこともあるが、世界的には、命をつなぐ最低の炭水化物を配るが、後は自助にゆだねるのが人道支援の考え方である。

非常食のうち、究極の非常食は、アメリカ軍隊の戦闘食である。MRE(Meal,Ready-to-Eat)には、24食の食事が入っており、すべて味が違う。24食のうち、3食はベジタリアン用の食事であり、どんな人でも食べられる食事となっている。民族性も反映し、一食ごとにヒーターがついており、温かいものを食べる。戦闘という究極の現場であっても、温かいものを食べるということにこだわりをもっている。

しかし、災害時において、ここまで行政に期待することは酷である。行政は災害時、誰に対し用意をするのか。大多数の人への対応が優先である。そのため、一人ひとりの自助が大切なのである。消防隊や自衛隊は人命救助が最優先であり、72時間は他に手が回らない。その72時間分の備えを各自でしておいてほしい。また食料と同じくらい大事な温かいものための燃料(固型燃料など)を備えたり、肉などの生ものは火を通してから冷凍保存することで、調理いらずの備蓄食を増やすという工夫もできる。

災害から個人や家族、地域を守るためには、私たち一人ひとりが災害への認識を深め、備え

を強化することが重要である。

2. パネルディスカッション

～地域との共助を考える～

パネリスト 大阪赤十字病院 栄養係長

伊藤 大翼氏

テーマ「災害時の応援体制を普段の取組より考える」

当院では、国際救援事業と国内救護活動を行っている。当院が被災したとき、患者にどう食事を提供するかが問題である。ライフラインの対応については、水道は井戸水の活用と日頃から二重化している揚水ポンプの活用、電気は関西電力より3回線での給電、非常用発電機の稼働、そして蒸気やガスについても稼働できる状態となっている。備蓄食品については、食事をする患者600人分で3日分を備え、災害1日目には箱、缶、袋のものといった配付がしやすいものにするという工夫をしている。

パネリスト 相愛大学 客員教授

坂本 廣子氏

テーマ「今、子どもを守る防災とは」

子どもの命を守るために、物以外の準備では、心肺蘇生の練習をしておくことが大切である。災害発生時はすぐに救急車はこない。胸の垂直圧迫を行うが、子どもには5本指でポンポン、赤ちゃんには3本指でトントンが適当である。また、震災時では粉塵が舞うので、肺機能を守るためマスクをする。マスクは台所にあるキッチンペーパーでも作れ、赤ちゃんにも使用できる。

その他、ラップで止血や三角巾の代用をするなど、台所用品が活用できる。子どもが自分で自分を守る力をつけるため、「コアラさんだっこ(しがみつく)」、「あかちゃんはいはい(煙から身を守るための逃げ方)」、「大きな声をだす」の練習をしておくことが大事である。また、普通に食べているものを1.5倍持っておき、サイクルで利用する回転備蓄も普段の備えとしてよい。

相愛大学によるアンケート結果では、防災に関心をもった時期が、小学生、高校生の頃であるという回答が多かったが、日常で心がけていることはないという現状がある。各人の防災意識の具体化が必要であり、自分の命は自分で守ることが大切である。

(文責 行政 原久美子)